



「神の地」ラサにおけるマスツーリズムの隆盛 : チベット自治区ラサ市の観光の動態

山田, 勅之

(Citation)

鶴山論叢, 09:63*-81*

(Issue Date)

2009-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81001751>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001751>



「神の地」ラサにおけるマスツーリズムの隆盛

－チベット自治区ラサ市の観光の動態－

The Prosperity of Mass Tourism in Lhasa as “the Land of Deities”:
The Dynamism of the Tourism in Lhasa, Tibet Autonomy Region

山田 勅之

【要旨】

経済発展が著しい中国では、近年観光の分野においても大きな発展が見られる。特にチベット自治区では立ち遅れた経済を発展させる手段として、観光は中央政府から重視され、2000年以降は他の中国内地同様、マスツーリズムの奔流が押し寄せている。

チベット族のほとんどは仏教を信奉し、仏教的価値観に基づく独特の文化が育まれてきた。他に例を見ないチベット文化は今日、観光資源として高い価値を有している。このようなチベット自治区の観光資源のうち、国家旅游局によって国家旅游景区が12ヶ所指定され、そのうち6ヶ所がラサ市に集中している。

そこでラサ市の観光の現状を探るために、まずラサ市の観光スポットについて、日本や中国の旅行会社のツアー募集広告やチベット自治区旅游局のラサの観光モデルコースなどを分析した。その結果チベット自治区最大の観光スポットは、チベット仏教の最も重要な聖地でもあるポタラ宮の大昭寺であることがわかった。次に2007年9月に行なったポタラ宮と大昭寺の現地調査の結果から、入場者制限の履行が徹底されていない大昭寺において、無秩序ともいえる混雑ぶりが明らかとなった。

このような状況を改善する方策としてガイド・ツアー（guided tour）を検討した。課題として、主に僧侶のガイドの仕事と仏教修業の兼ね合いをどのように図るか、という点が残るが、ガイド・ツアーは観光客とそれを受け入れる僧侶との間に相互理解を生む一つの機会となり、さらにそのことは民族問題が度々持ち上がるチベット自治区において、社会の安定に寄与し、結果として観光の持続的な安定にもつながる方向性を有していると考えられる。

【キーワード】

チベット仏教、マスツーリズム、聖地、ガイド・ツアー、民族問題
Tibetan Buddhism, Mass Tourism, Sanctuary, Guided Tour, Ethnic Problem

はじめに

経済発展が著しい中国では、近年観光の分野においても大きな発展が見られる。道路や鉄道、空港の建設といったインフラ整備はもとより、観光スポットの制度化も含め、観光に関する諸々は国家の政策に拠るところが大きい。それは本稿が取り上げるチベット自治区⁽¹⁾において、特に経済を発展させる手段として観光が重視されてきた⁽²⁾。

チベット自治区は中国の西南部に位置し、ヒマラヤ山脈をはじめとする6000～8000メートル級の山脈に囲まれている。これら山脈の内側がチベット高原で、標高はおよそ3000～5000メートルである。このような険しい地形が、外からの進入を阻み「秘境」というイメージを膨らませてきたといえる。人口は2007年時点で273万5867人、その内チベット族⁽³⁾が260万2788人で全自治区人口の95.14パーセントを占める〔『西藏社会経済統計年鑑2008』〕。そのチベットの中心地であるラサ（lha sa）はチベット語で「神の地」を意味し、7世紀にチベットを統一したソンツェンガンポ（srong bstan sgam po）王が都をラサに定めて以来、ほぼ一貫してチベットの宗教、政治の中心地であった。現在においても、空港や鉄道駅を要する経済、交通の要衝であり、人口約18万人⁽⁴⁾を擁するチベット自治区最大の都会で区都でもある。

また、チベット族のほとんどは仏教を信奉している。インドからチベットに仏教がもたらされたのは8世紀後半で、以来連綿とインド仏教を吸収し続けた。13世紀初頭にインド仏教が消滅した後は、チベットはインド大乘仏教の継承者として自らを認識するようになる〔山口2004,178〕。そのため仏教的価値観が人々の生活や習慣に浸透しており、チベットでは独特の文化が育まれてきた〔スタン1993,187〕。これら他に例をみないチベットの文化は、元来観光資源としての価値も高く、今日におけるチベット自治区の観光発展の素地を備えていたといえる。

このように、豊富な観光資源を有するチベット自治区では、2000年以降マスツーリズム（mass tourism）⁽⁵⁾の奔流が押し寄せている。その一方で、チベット自治区は1989年のラサ暴動とその後の戒厳令施行、そして2008年3月のラサ騒動に見られるように、断続的に反政府運動や独立運動が発生し、その度に観光客の受け入れが厳しく制限されてきた⁽⁶⁾。このことは、社会の安定がなければ存在すら危ぶまれる観光業をチベット自治区において発展させるためには、民族問題の解決をはかり、社会の安定を図らなければならないことを示している。

従来、中国の観光に対して、観光政策や観光人類学、環境問題といった様々な視点から論じられ、研究の蓄積がなされてきた⁽⁷⁾。その中にはチベット観光に関する専論（蔡2002, 2003；陳・王2005）も見受けられる。いずれの論考もチベット文化や自然環境の保護と観光の発展の矛盾を指摘した上で、チベット観光の持続的な発展について模索しているが、政府による観光政策を具体的な法令や通知に基づいて検証しておらず、また現地調査などから現状を把握していないため、問題が何であるかを明確に示していない。

本稿では、以上のような問題意識と先行研究の現状を踏まえて、まず、1951～2007年までのチベット観光発展の歴史の変遷を俯瞰し、次に政治的にも文化的にもチベット自治区の中心であるラサ市を事例として取り上げ、観光の発展が観光スポットにどのような影響を与えているのか、現地調査の結果を交えながら具体的に検証する。最後にその結果から析出された問題を分析し、今後の方策を検討したい。

I チベット観光の歴史の変遷

1 1951年～2000年までの展開

胡海燕・陳波（2001, 23-56）によれば、この時期のチベット自治区の観光の展開は、イ）萌芽期（1951-1978年）、ロ）初期発展期（1979-1989年）、ハ）発展期（1990-2000年）の3つの時期区分に分けられるという。以下、それぞれの時期の特徴を俯瞰してみたい。

イ）萌芽期では、国内観光は科学調査団やヒマラヤ登山隊、政府要人の訪問などに限られており、国際観光もヒンドゥー教やチベット仏教の聖地であるカイラス（kailasa）山やマナサロワール（manasarovar）⁽⁸⁾湖などを巡るインド人やネパール人巡礼団⁽⁹⁾、あるいは政府が特別に招待した国際要人にのみ開かれたものだった。この時期は国内観光、国際観光いずれにおいても、観光は政治的、宗教的行為であって、余暇の楽しみを売買する産業としての観光⁽¹⁰⁾とは、かけ離れたものであった。

ロ）初期発展期では、1978年の改革開放政策に基づき、チベット自治区内においても経済活動としての観光の基礎が形成されていく。1979年12月、ラサにチベット自治区初の旅行会社である中国国際旅行社⁽¹¹⁾ラサ分社が設立された。また、寺院を観光地として対外開放することも始められた。多くの寺院が1959年のチベット動乱やその後の文化大革命によって大なり小なり破壊を被ったが、1979年

だけでもラサの大昭寺やセラ (se ra) 寺、デブン ('bras spung) 寺、シカツェ (gzhis ka rtse) のタシルンポ (bkra shis lhun po) 寺、ギャンツェ (rgyal rtse) の白居寺が政府によって修復され、観光客に公開された。他方、このようなハード面だけではなく、関連する法律の制定やガイドの育成といったソフト面の整備も着手がなされた。1986年11月に、西藏自治区人民政府『關於外国零散旅游者服務管理工作若干問題的暫行規定』が制定され、法的に外国人の旅行の管理がなされるようになった。また、1987年にチベット自治区旅游局によって『旅游教育培訓十年規画』が立てられ、10年で通訳400名、旅行社管理人員75名、ホテル管理人員175名の育成を図る数値目標が示された。これらは国際観光客の需要に対応するものであった。しかし、このようなチベット観光の発展に向けた流れは1987～89年にかけて頻発した独立運動によって減速を余儀なくされ、1989年のラサ暴動鎮圧後の戒厳令施行により、一時頓挫してしまうのである。

ハ) 発展期では、1990年の戒厳令解除後であるが、さらにホテルや旅行会社などの産業としての量的拡大が見られるようになる。星付きホテル¹²⁾は、1990年5軒であったのが、1995年にはその倍の10軒、1999年には14軒に増加した。旅行会社も1993年に23社であったのが、1995年に42社、1997年に47社に増加し、それに伴って従業員数も増加していった。ただ、このような量的拡大はサービスの質の低い会社がいくつも生じる結果となり、2000年に旅游局の指示により、そのような会社が廃業させられ36社となった。

これらイ)、ロ)、ハ) の時期区分を通観してみると、中国の政治経済政策を特徴づける時期と概ね符合していることがわかる。すなわち、イ) は毛沢東を領袖とする政治主導の時代、ロ) は改革開放が始動されてから1989年の天安門事件までの市場経済の導入がようやく始まった時期、ハ) は天安門事件で頓挫した改革開放政策が、92年の鄧小平の南巡講話によって一挙に加速化された時期である。

以上から国家の政策のもと、発展してきたチベット観光であるが、一度民族問題があらわになると阻害されてしまうことも読み取れる。

2 2000年以降の展開

次に2000年以降に展開について、旅行者数の推移からチベット自治区におけるマスツーリズムの動態を俯瞰してみたい。

表1は、チベット自治区を訪れた旅行者数の推移を示したものである。2000年以降の統計と比較するために、1997年からの統計も表記した。まず、国際観光客¹³⁾の推移を見てみると、2001年と2003年に減少しているのがわかる。特に2003年の

表1 チベット自治区入境者数

	国際観光客 (人)	外国人 (人)	香港、マカオ、台湾 (人)	中国国内観光客 (人)	合計 (人)
1997年	8万1800	7万3412	8388	28万4810	36万6610
1998年	9万6444	8万7039	9405	29万0199	38万6643
1999年	10万8224	9万8966	9258	34万0323	44万8547
2000年	14万9441	13万4539	1万4902	45万8894	60万8335
2001年	12万7148	11万6440	1万0708	55万8968	68万6116
2002年	14万2279	12万9617	1万2662	72万5041	86万7320
2003年	5万1120	4万5685	5435	87万7519	92万8639
2004年	9万5816	8万8797	7019	112万7282	122万3098
2005年	12万1308	11万1018	1万0290	167万9315	180万0623
2006年	15万4818	13万6159	1万8659	235万7285	251万2103
2007年	36万5370	33万8744	2万6626	366万4068	403万0438

(出所)『西藏社会経済統計年鑑2008』240.

落ち込みが激しいが、これは **SARS** の影響によって、チベット自治区に限らず中国全体の国際観光客数が落ち込んだ年である。一方、中国国内旅行者数は **SARS** の影響に左右されることなく、増加し続けている。特に2000年以降は前年の入境数に対して飛躍的に増加している。この年から5月1日の労働節と10月1日の国慶節のそれぞれに休暇を加えて大型連休が設定され、中国国民による国内旅行ブームが始まった。中国におけるマスツーリズム元年ともいえる年であり⁽⁴⁾、チベット自治区を訪れる国内観光客も急増したと考えられる。さらに青蔵鉄道が開通した2006年は前年より約68万人も増加し、翌2007年には360万人を突破した。また、国際観光客数と国内観光客数の差が年々開いていることがわかる。1997年は20万人程度の差であったのが、2006年になるとその差は220万人に広がり、旅行者の大半が国内観光客で占められるようになった。

Ⅱ ラサ観光の現状

中国では、観光スポットの質を向上させるため、国家旅游局がそれらをランク付けしている。チベット自治区においても同様に、そのような観光地が12ヶ所存在する。それらをまとめたものが表2である。

評価のランクは5 Aを最高とし、1 Aが最低とされているが、チベット自治区の場合、4 Aが最高となっている。4 Aの判定は「全国旅游景区質量等級評定委員会」が、3 A～1 Aは「各省級旅游景区質量等級評定委員会」が、それぞれ定められた基準に則って行なうことになっている。ランク決定後も、場合によっては降格や取り消される可能性もあるという〔中国国家旅游局2005.『旅游景区質量等級評定管理弁法』〕。

表2から、ポタラ宮などの文化的観光スポット9件とチョモランマ国家級自然保護区のような自然景勝の観光スポットが3件が指定されているのがわかる。また、これら12ヶ所のうち、半分の6ヶ所がラサ市に集中している。ラサ市のチベット自治区における位置付けや観光スポットが集中している状況から、ラサ市を特

表2 チベット自治区における国家旅游景区

	地 域	名 称	ランク	指定の年
①	シカツェ地区	チョモランマ国家級自然保護区	4 A	2005
②	山南地区	サムイェ寺	4 A	2005
③	シカツェ市	タシルンポ寺	4 A	2003
④	ラサ	西藏博物館	4 A	2001
⑤	ラサ	ポタラ宮	4 A	2001
⑥	ラサ	大昭寺（ジョカン）	4 A	2001
⑦	ラサ	ノル布林カ宮殿	4 A	2001
⑧	ラサ	娘熱度假村	3 A	2005
⑨	ラサ	ネタン・ドルマラカン	1 A	2005
⑩	林芝地区	バソン・ツォ旅游区	4 A	2001
⑪	チャムド地区	ラウ湖	2 A	2006
⑫	チャムド地区	ツクラカン	2 A	2005

（出所）中国国家旅游局「旅游景区」『中国旅游网』（2008年4月7日アクセス）。

に取り挙げて考察することは、チベット自治区全体の観光の現状を考察する上でも意義あることと考えられる。

そこで、ラサ市における観光の現状を検討したい。

観光客がどういった観光スポットを訪れたいのかを考察するには、観光客の性別や国籍、年齢、職業といった属性や彼ら自身の経験によって異なることが予想され、実情を捉えることは容易ではないと思われる。他方、旅行会社のツアー募集広告や旅游局が提供している紹介文などは、観光客がその地に足を運ぶようイメージの喚起がなされているため、むしろそれらを検証することの方が有効といえる。

表3は日本の旅行会社7社が発表している2008年度上期（2008年4月～9月）募集型企画旅行の募集広告から、訪問予定と記されているラサの観光スポットをピックアップしてまとめたものである。日本の旅行会社を分析対象に選んだ理由は、2007年においてチベットを訪れた国際観光客の中で日本人が最も多かったからである〔中国国家旅游局2007.「日本成為西藏入境旅游第一大客源」〕。A～C

表3 日本の募集型企画旅行の募集広告記載のラサの観光スポット

	ポタラ宮	大昭寺	八角街 (パルコル)	ノルプ リンカ	セラ寺	デプン寺	アニツァ ングング	サンゲェ・ ドゥング	薬王山	博物館
A1	○	○	○		○					
A2	○	○	○	○	○	○	○			
B	○	○	○	△	○				○	
C	○	○	○	○	○					
D	○	○	○	○	○	○				
E1	○	○	○	○	○			○		
E2	○	○	○	○	○	○		○		
E3	○	○	○					○		
F1	○	○	○	○	○		○			○
F2	○	○	○	○	○	○	○			○
G1	○	○	○	○	○	○				
G2	○	○	○	○	○	○				○

（出所）A～G社の募集型企画旅行の募集広告（各社ホームページより）。

（注）○は必ず訪れる観光スポット、△が希望者のみ訪れる観光スポット。

の3社は国内、国際観光を問わず幅広い旅行商品を取り扱っている大手総合旅行会社で、D～Gの4社は中小規模の会社で特定の分野に特化した旅行商品を企画販売する専門店である。同じラサを訪れるパッケージツアーでも、旅行会社によっては、青蔵鉄道を利用するツアー、あるいは国内線を利用するツアー、ラサだけではなく他にシカツェやギャンツェも訪れるツアーなど複数のパッケージツアーを設定して販売している。そのような場合、アルファベットの横に数字を記して区別した。

以上、7社12ツアーの募集広告に記載されている観光スポットを全てを合わせると10ヶ所であったが、旅行会社によって訪れる観光スポットに違いがあることがわかる。たとえば、E社のみサンゲ・ドゥングを訪れ、B社のみ葉王山を訪ねている。このような違いは他社との差異化をはかるために生じたものであろう。同じ会社でもツアーによって訪れる観光スポットが異なっている場合がある。A1はラサ滞在が2日で、A2は3日である。そのため滞在時間が短いA1ではノル布林カ宮殿とデプン寺、アニツァングの訪問を削っている⁽⁴⁵⁾。また、セラ寺を訪れるのは11ツアー、デプン寺を訪れるのは6ツアーであった。一方で、各社各コース共通して訪れる観光スポットにポタラ宮と大昭寺、八角街が挙げられる。ポタラ宮と大昭寺はいずれもユネスコの世界歴史遺産に登録されており、八角街は大昭寺を巡る巡礼路で、ほぼ大昭寺と一体となった観光スポットである。以上から、これら観光スポットは滞在日数が少なくても訪れるべき名所であると各社認識していると言える。外国人がチベット自治区を旅行する場合、中国内地のほとんどの地域と異なり、入境許可証を取得しなければならない〔西藏自治区旅游局『外国人為何需要弁理“入藏旅游批准函”』〕(2008年4月6日アクセス)。さらにこの入境許可証を取得するためには、事前にホテルやガイドの手配を完了しておかねばならず、いきおい値段が安く手間がかからないこのようなパッケージツアーが多く利用されていると推測される。

他方、中国国内の旅行会社のインターネット上の募集広告やチベット自治区旅游局のホームページ上で紹介されているラサの観光モデルコースでは、どのように記載されているだろうか。チベット自治区内の旅行会社10社をピックアップしてラサ観光の内容を見てみると、1社だけが西藏博物館とノル布林カ宮殿を訪れるツアー用意していたが、他の会社のツアーはポタラ宮と大昭寺、八角街しか訪問しないことになっている⁽⁴⁶⁾。また、チベット自治区旅游局のラサ観光のモデルコースも同様であった。

以上から、現在国際及び国内観光客が、最も多く訪れるのはポタラ宮と大昭寺

であることがわかる。

では、チベット文化の文脈では、ポタラ宮と大昭寺はどのように位置づけられるであろうか。ラサの街は宗教的観点から見れば、ポタラ宮と大昭寺の2ヶ所を中心とするマンダラ都市とも言われる。ポタラ宮はダライラマの居殿で、1647年ダライラマ5世がまず白宮と呼ばれる宮殿を造営し、次いで1696年ダライラマ5世の摂政・サンギェギャムツォ (sangs rgyas rgya mtsho) が5世の遺体を収めた仏塔を祀る紅宮を増築した〔『岩波仏教辞典』2002, 926〕。ダライラマは観音菩薩の化身とされることから、ポタラ宮は観音菩薩が座す地といえる。このポタラ宮のまわりにはツェコル (rtse skor) と呼ばれる環状の巡礼路があり、そこを巡ればあたかも観音菩薩のまわりを巡る構造となっている。一方、大昭寺はチベット最初期の寺院で、唐の文成公主が招来した釈迦如来像が安置されているという〔『岩波仏教辞典』2002, 763〕。この大昭寺の中でジョカン ('jo khang) と呼ばれる仏殿の外側にナンコル (nang skor) と呼ばれる巡礼路があり、その外側にパルコル (par skor) と呼ばれる巡礼路が巡っている。つまり、こちらは釈迦如来の周囲を巡る構造となっているのである。さらに、これら円形の巡礼路を包摂するように楕円形で囲んでいる道がリンコル (gling skor) と呼ばれる巡礼路である。つまり、チベット仏教を信仰する多くのチベット人にとって、ポタラ宮と大昭寺は聖地であり〔奥山1993〕、現実には多くのチベット人が巡礼に訪れている。チベット人にとって巡礼とは、福德を積む宗教的実践であり、そうすることで来世において少しでも良い業^{カルマ}が得られると期待するのである〔スタン1993, 198〕。

これに対して、旅行会社や旅游局ではラサ及びポタラ宮、大昭寺についてどのような説明をしているだろうか。具体的に見ていきたい。

まず、ラサについて日本の旅行会社のツアー募集広告には「聖都ラサ」(E社)、「チベット仏教の真髄」(A社)、「篤き信仰に触れるラサ観光」(B社)と記されており、宗教的価値観が強調されている。次にポタラ宮については、日本の旅行会社では「ポタラは補^{ママ}墮落、つまり観音菩薩の住まう場所」(F社)、「ダライラマの居所」(B社、C社)と記されている。チベット自治区旅游局のホームページでも基本的に観音菩薩の地という説明がなされているが、それに加えて「清朝の冊封を受けたダライラマ5世が建設、……政教一致のガンデンポタン (dgang 'ldan pho brang) 地方政権⁷⁷を確かなものとするために、摂政・サンギェギャムツォが紅宮を建てた」といった近代以前の中国とチベットとの関係を示す歴史的背景の説明や、「1988年国務院は巨費を投じて修理をすることを決め、…5年の工事期間を経て、1993年に修理が終わった」とあるように歴史遺産の保護に政府が強

力に関わっていることを併せて記している〔西藏自治区旅游局2008.『布達拉宮』〕。大昭寺について、日本の旅行会社では「信仰篤いチベットの人々が祈りを捧げている」(F社)、「巡礼者が集う大昭寺」(A社)、「^マラマ^マ教の総本山であり、五体投地の礼で知られる」(G社)など宗教的観点からイメージを喚起している。中国の旅行会社のツアー募集広告にも「五体投地が行われる神聖な場所」(X社)などとほぼ同様のことが記されている。また、チベット自治区旅游局のホームページ上でも、「チベット仏教の最も神聖な寺院」、「歴代ダライラマ、パンチェンラマの受戒の儀式が行われたところ」とあるように宗教的観点からの説明がなされている。同時に、大昭寺の門前に安置されている「唐蕃会盟碑⁹⁸」について、その写真を付して唐王朝と古代チベット王国との関係を説明し、中国とチベットとの歴史的密接性を記している〔西藏自治区旅游局2008.『大昭寺』〕。

以上から、ラサ最大の観光スポットはチベット文化の中心であることがわかる。そして、これら観光スポットに対するチベット自治区旅游局の説明には、宗教的観点の他にチベットと中国との関係に関する歴史的説明が付加されているものの、旅行会社とチベット自治区旅游局のいずれもが、宗教的文化的文脈を認識し、その上で、一段の人々にイメージの喚起をはかっていることがわかる。

では、次にこれら両観光スポットの現状を一昨年9月に実施した現地調査を基に明らかにしたい。

Ⅲ 観光スポットとしてのチベット仏教の聖地・ポタラ宮と大昭寺

1 ポタラ宮の観光

前述の通り、2006年7月1日に青藏鉄道が開通した結果、チベット自治区を訪れる観光客は爆発的に増加した。それに比例してポタラ宮を訪れる観光客も激増したため、ポタラ宮の建物としての耐用が不安視されることになった。これに対してチベット自治区旅游局はポタラ宮の入場数を1日あたり団体観光客で1600人、個人観光客で700人、あわせて2,300人に制限し、また、1人当りの参観時間を1時間以内に制限した〔西藏自治区旅游局『布達拉宮日限接待2300人、参観時間控制在1小時』〕、また、午前は旅行者が、午後は巡礼者が見学するように決められている。このような見学上の条件を踏まえて、2007年9月16日～18日に実施した現地調査に基づいて、ポタラ宮観光の現状を明らかにしたい。

今回の調査には1名の日本語ガイドが同行した。まず向かったのはポタラ宮ではなく、旅游局であった。その目的は「ポタラ宮入場許可証」を受け取るためで、

これを取得しなければポタラ宮へ入場することはできない。ポタラ宮に到着すると、まず安全検査場にて身体検査を受け¹⁹⁾、それを終えると、次にポタラ宮の正門へ向かい、先ほど取得した入場許可証を係員に提示する。そこで入場時間を印字したスタンプが押される。この時間から1時間以内に参観を終えなければならない。入場券売り場はこの正門から階段を上がり白宮の建物の入口をくぐったところに位置している。料金は1人100元であった。

見学はダライラマが政務を執ったこの白宮から、歴代ダライラマの霊廟が並ぶ紅宮へと向かう。階段の昇り降りが多く部屋数が多いため、初めて来た者には迷路のように感じられるし、何よりも制限時間が1時間しかないので、ガイドのペースに任せるしかなく、自由に参観できる状態ではなかった。出口（西門）には係員が配置されており、入場許可証に退場時間が押されて見学を終了した。

筆者は過去に1993年と1996年、1998年の計3回ポタラ宮を訪れているが、いずれの時も入場者数や見学時間の制限はなく、また旅行者と巡礼者の入場時間帯が分けられていなかったため、すし詰め状態であった。それに比べると、今回はスムーズに見学することが出来たので、このような規制が有効であったといえよう。また、何よりもポタラ宮の建物の維持という観点から有効な手段の一つと考えられる。

2 大昭寺の観光

大昭寺はポタラ宮のように、入場者数の制限が設けられていない。従って、事前に入場許可証を取得する必要はないが、午前個人観光客と巡礼者が入場し、午後は10名以上の団体観光客及び個人観光客が入場するように決められている。また、見学は門をくぐったところにある中庭で20分以内、様々な仏像が並ぶ仏殿で10分以内、屋上で20分以内というように時間が制限されている²⁰⁾。

このような制限を踏まえて、今回はガイドの手配はせず、単独で大昭寺を訪れた。朝8時過ぎに正門前に到着すると、多くの旅行者と巡礼者が入場のために並んでいた。その傍らでは一心不乱に五体投地²¹⁾を繰り返す人々で溢れ返り、その様子を撮影しようとする観光客が彼らにカメラの放列を向けている。このようなラッシュアワーの駅の中にいるような状態の中で、公安が巡礼者と旅行者に対して分かれて並ぶように指示している。入口を抜けて中庭に入ると、入場券売場がある。1人70元であった。時間制限が設けられているが、ポタラ宮のように時間を印字するなどして管理しているわけではなかった。仏殿へ入ると狭い通路を右回りに見学する。右回りに進むのは仏教徒の習慣に拠るものだが、観光客もたと

え逆行したくとも巡礼者が多いため、それに従わざるを得ない状況である。見学ポイントとしては本尊の釈迦如来像以外にも、様々な種類の仏像があるが、それらは通路の外側に狭く仕切られた部屋に安置されている。巡礼者はそのような部屋を一つ一つ丁寧に参拝していくが、観光客のほとんどは本尊のみを見て退場してしまうようだ。ここでは、立ち止まって見学していると寺の僧侶から、時折早く進むようにと身振りで指示されるが、それで混雑が緩和されるわけではない。

このように、大昭寺はポタラ宮と比較すると入場者制限をしていないため極めて混雑している。門の前ではロープを張って、入場を待って並んでいる者たちが列からはみ出して、五体投地を行なう巡礼者を邪魔しないようにしているが、如何せん入場者数がありにも多すぎるため、はみ出してしまう者が出ていた。また、五体投地をする人々を撮影しようとする観光客が、入口付近に立ち止まったり、あるいは脚立を立てて場所を取っているため、さらに混雑の度合いを深めている。巡礼者をも見学の対象としながら、その巡礼者を押しつぶさんばかりである。このような原因は整理する公安の人数が訪れる観光客に比べて少ないことも挙げられるが、何よりも人数制限を設けていないことが原因である。

また、見学時間の制限が上述のように一応定められているが、実情はポタラ宮のように厳格に時間管理がなされていないため、履行されているとはいえない。このことも混雑が緩和されない原因といえよう。

以上、ポタラ宮と大昭寺の観光の現状を現地調査に基づいて明らかにした。次節では、そこから析出された問題点を整理し、今後の方策を検討したい。

Ⅳ ラサ観光の問題点と今後の方策

まず、問題点を2点挙げておきたい。第1点は観光客がありにも多いため、規制を加えなければ大変な混雑になるということである。規制を実施しているポタラ宮と不徹底な大昭寺では対照的な様相を呈している。第2点は聖地としての機能を考えるなら、建物内部だけではなく、その周辺も考慮に入れて、混雑緩和に向けて何らかの方策を検討する必要があるということである。特に大昭寺はポタラ宮と比較して空間的に狭く、また隣接している巡礼路の八角街が土産物の商店や屋台が並ぶ観光客向けのショッピング街ともなっているため、極めて混雑している。

これら2点の問題を解決するには、規制を設けてその履行を徹底すれば、物理的にある程度混雑は解決されるだろう。ただ、大昭寺の場合、ポタラ宮と異なり、

宗教的聖地であると同時に、僧侶が修業する寺院としての機能も有していることから、規制強化だけでなく観光スポットとして見せる手法も工夫する必要があると思われる。

では、まず具体的な方策の検討をする前に、他の国や地域の事情に触れておきたい。

同じチベット文化圏であるブータンでは僧侶修業の妨げになるという理由で、ほとんどの寺院では寺院内部の見学は禁止されていることが多い〔栗田1996,169〕。他の宗教においても、たとえばヒンドゥー教の寺院では本堂の見学が禁止されていることが多く、またイスラム教の寺院も礼拝時間は敷地内へ入れないことが多い²³⁾。しかしながら、このように一方的に見学をさせないという方策は、経済成長を重視し、また国内旅行ブームが始まったばかりの中国では現実的とはいえない。また、宗教問題が民族問題や独立運動に発展するチベット〔毛里1998, 162〕では、特に宗教活動については敏感であり、僧侶に対する愛国主義教育が継続されている現状²³⁾を踏まえれば、国の政策に優先するような宗教活動への理解や保護には制限が加えられるだろう²⁴⁾。実際に即して観光の需要と受け入れ側の性格に見合った方策、さらに政治的に微妙なバランスをも考慮に入れる必要がある。

筆者は2000年8月に甘粛省のラブラン（lha brang）寺を訪れたが、そこでは見学時間を設定して、僧侶が旅行者を引率して仏殿などを案内していた。通常仏殿は閉じられており、カギは案内の僧侶が持っているため、入場券を購入してもこの案内の僧侶に同行しなければ見学できないシステムとなっている。形態としては、ヨーロッパの観光地で見られるガイド・ツアー（guided tour）²⁵⁾に近いといえるが、引率の僧侶は何の説明もせずに単にカギの開け閉めをするのみであった。もちろん、このようなことが可能なのは、大昭寺と比較してラブラン寺を訪れる観光客が極端に少ないという側面があるのも事実である。

ただ、現状に即して工夫をすれば、大昭寺においてもこのガイド・ツアーという方法は参考になるのではないだろうか。つまり僧侶がガイドとして寺院を案内するのであるが、単に見所を説明するだけではなく、チベット仏教の概略や参観上の注意などを説明し、さらに仏教徒として巡礼を行う意義も説明することで、聖地としての大昭寺の機能をも旅行者に理解してもらう。筆者が2000年1月に訪れたオーストラリア・タスマニア島の国立公園では、自然保護に関するグリーンフィングが行なわれていた。同時にそのようなことを大昭寺においても行なえば、これまで大量の旅行者が集中豪雨的に通り過ぎるだけであった状況が、受け入れ

側と旅行者の間で、多少なりとも相互理解が生まれるきっかけとはならないだろうか。その際、ドラマや政治に繋がる問題は控えるべきだろう。またガイド・ツアーは通常、時間を区切り1回に入場できる人数を定めて行なうので混雑も避けられるであろう。各旅行会社のツアーの募集広告を見ると、大昭寺を見学した観光客はその足で八角街へ向かうことが多いことを考慮すると、大昭寺での混雑が緩和されれば、門前で五体投地を行なったり、八角街を巡礼する巡礼者の行為が妨げられることも少なくなるだろう。

以上のような利点がある一方で、このようなガイド・ツアーを実施する前提として、観光客を受け入れる大昭寺側にも解決をしなければならない問題がいくつか存在する。たとえば、僧侶が説明する際の言語の問題や、修業が生活の中心である僧侶がガイドの仕事を継続的に従事することができるのか、といった問題である。言語の問題は同行する旅行会社のガイドや添乗員が通訳すれば、ある程度解決されるだろう。また、ガイドについては見方を換えれば、僧侶の役目の一つに仏法を有情に説くことがあり、ガイド・ツアーの目的が僧侶の本分からはずれた行為とは必ずしもいえない面もある。仏教的価値観に則った動機づけを行なった上で、本来の仏教修業と見学の需要の高さを勘案して、いかに効率よくガイド・ツアーを実施するかが鍵となろう。

おわりに

チベット自治区において観光客が最も訪れる観光スポットは、仏教を基底とするチベット文化の象徴であり、多くのチベット人にとって聖地であるポタラ宮や大昭寺であった。現地調査の結果から、このうち規制が不徹底である大昭寺では無秩序ともいえる混雑を招き、マスツーリズムの負のインパクトが顕著に現われていることがわかった。また、単に大昭寺という施設だけが観光対象となっているのではなく、聖地なるがゆえに巡礼者をも観光対象とされていた。しかしながら、巡礼者は宗教的習慣に基づいて行動しているのであって、たとえばフィジーのホテルで催す「火渡り」のパフォーマンス〔橋本1996, 165-166〕や貴州省ミャオ族の舞踊〔曾2001〕のように、あらかじめ観光客に見せるために、「巡礼」を創造したのではない。大量の観光客によって無償で観光対象とされるばかりか、巡礼そのものが妨げられさえしている。周知の通り、2008年3月に発生したラサ騒動の影響で、一時観光客の受け入れが禁止され、当年のチベット自治区における観光客数は前年と比べて減少することが予想されるが、中国政府の観光に対す

る強力な後押しを考慮すると、暴動を伴う民族問題さえ発生しなければ、来年以降さらなる発展が予想される²⁶⁾。そして、量的拡大のみを追求すれば、今後巡礼や僧侶の修行もままならなくなる事態が起きる可能性がある。さらにチベット自治区では寺院が観光スポットとなっていることが多いことから、ひとり大昭寺だけの問題ではなく、将来チベット自治区全体に影響を与えかねない。観光の発展によって、観光の魅力の一つであるチベット文化に触れる機会が減じることとなり、却って観光客の来場者数が減少する恐れがある。つまり、単なる量的拡大を図るだけでは、長期的な産業としての発展をも削がれてしまう可能性があるといえる。

他方、チベット族は宗教に基づく文化的アイデンティティを強固に持つゆえに、宗教的実践の妨げに対して不満が高まり、直接暴動に発展するとまではいかなくとも、観光客に危害が加えられるような事件が発生する可能性も想定される²⁷⁾。

以上のような事態を避けるためにも、一方策としてガイド・ツアー実施の検討を試みた。これは従来の国家を中心とする他律的な観光開発²⁸⁾ではなく、旅行者を受け入れる側が自律的に観光開発を行なうものであり、受け入れ側と旅行者の間に相互理解を育み、さらに持続可能な観光開発の一方策になると考えられる。このことは、チベットを訪れる観光客の多くが国内観光客であることを考えれば、チベット族と漢族を中心とする他の中国国民との間の相互理解を生む機会にもなると思われる。そして、相互理解の促進は民族問題を抱えるチベット自治区の社会の安定に微力ながら寄与できる可能性を秘めており、このことは、チベット自治区における観光の持続的な発展に繋がる方向性を指しているのではないだろうか。

歴史的にチベット自治区では、民族問題が観光の発展の阻害要因となっている。社会の安定、治安の維持が観光の発展には必須であるが、観光によってもたらされた富が、必ずしもチベット族の人々のもとに十分に行き渡っておらず、中国内地から移住してきた漢民族を中心とした人々に、より多く享受されているという[『朝日新聞』2008「観光地化 漢族増え摩擦」3月28日]。観光によって得られた利益の行方を検証して問題の析出を図り、方策を検討することを今後の課題としたい。

参考文献

日本語

『朝日新聞』2008「観光地化 漢族増え摩擦」3月28日。

- 石森秀三2001.「内部的観光開発と自律的観光」石森秀三・西山徳明編『国立民族学博物館調査報告』21, 5-19.
- 『岩波仏教辞典』2002, 岩波書店.
- 奥山直司1993.「ラサのコスモロジー——ヒマーラヤ周辺地域の都市に関する調査研究(1)——」塚本啓祥教授還暦記念論文集刊行会『塚本啓祥教授還暦記念論文集 知の邂逅——仏教と科学』佼成出版社, 377-388.
- 北川宗忠2004.「新しい時代の観光と文化—観光文化とニュー・ツーリズム—」北川宗忠編『観光文化論』ミネルヴァ書房.
- 栗田靖之1996.「鎖国と観光 ブータン王国の事例」石森秀三編『観光の二〇世紀 二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容3』ドメス出版, 155-171.
- (財)日本交通公社編2004.『観光読本』東洋経済新報社.
- 清水菜穂子2005.「中国における新たなエコツーリズムの潮流—国際環境 NGO の試み」『東アジア研究』42, 47-59.
- スタン1993. 山口瑞鳳・定方晟訳『チベットの文化』岩波書店.
- 曾士才2001.「中国における民族観光の創出—貴州省の事例から—」『民族学研究』66(1) 87-105.
- 橋本和也1996.「フィジーにおける民族文化の演出」山下晋司編『観光人類学』160-168. —1999.『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方—』世界思想社.
- 長谷川清2001.「観光開発と民族社会の変容—雲南省・西双版纳傣族自治州」佐々木伸彰編『現代中国の民族と経済』世界思想社, 107-131.
- 松本高明1996.『チベット問題と中国—問題発生 of 構造とダライ・ラマ「外交」の変遷』アジア政経学会.
- 松村嘉久2000.『中国・民族の政治地理』晃洋書房. —2001.「中国雲南省の観光をめぐる動態と戦略」『東アジア研究』32, 25-46.
- 毛里和子1998.『周縁からの中国—民族問題と国家』東京大学出版会.
- 山影進1988.「アジアにおける国民統合問題」平野健一郎・山影進・岡部達味・土屋健治 1988.『アジアにおける国民統合—歴史・文化・国際関係』東京大学出版会, 1-31.
- 山口瑞鳳2004.『チベット』下 東京大学出版会.

中国語

- 『西藏社会経済統計年鑑2008』西藏自治区統計局編 北京 中国統計出版社.
- 蔡国裕2002.「西藏旅遊業的定位與發展方向」『蒙藏地区現況双月報』台北 11(1). —2003.「西藏旅遊開發與文化保護之探討」『蒙藏地区現況双月報』台北 12(1).
- 陳立健・王珂2005.「浅析實現西藏旅遊業可持續發展的对策」『中国藏学』北京 72(4) 21-27.
- 胡海燕・陳波2001.『西藏50年 旅游卷』北京 民族出版社.
- 謝莉2005.「辺境旅游在西部開發中的意義及策略研究」『旅游管理』北京 (4)25-29.

- 中共西藏自治区委员会党史研究室編2005.『中国共産党西藏歴史大事記 1949-2004』第2卷 北京 中共党史出版社.
- 中共中央文献研究室1990.『新時期民族工作文獻選編』北京 中央文獻出版社.
- 2003.『民族工作文獻選編1990-2002年』北京 中央文獻出版社.

英語

- Deng Shi, Walker, and Zhang 2003, "Assessment on and Perception of Visitors' Environmental Impacts of Nature Tourism: A case Study of Zhangjiajie National Forest Park", China. In *Journal of Sustainable Tourism*, Vol.11. No. 6, 529-548. Clevendon.
- Xie. Philip Feifan, 2003. "The Bamboo-beating Dance in Hainan, China: Authenticity and Commodification". In *Journal of Sustainable Tourism*, Vol.11. No. 1 5-16. Clevendon.

インターネット

- 國務院法制弁公室『中国政府法制信息網』<http://www.chinalaw.gov.cn>
- 西藏日報『中国西藏新聞網』<http://www.chinatibetnews.com>
- 西藏自治区旅游局『西藏旅游网』<http://www.tibettour.cn>
- 中国国家旅游局『中国旅游网』<http://www.cnta.cn>

【註】

- (1) チベット族の居住範囲はチベット自治区だけではなく、青海省や四川省、甘肅省、雲南省の一部にも及ぶが、『民族区域自治法』に見られるように、少数民族に対する政策は行政単位で実施されることがほとんどであることから、本稿ではチベット自治区を検討の対象とする。また、チベットという場合はチベット文化などのようにチベット族共通の事柄を指すこととする。
- (2) 1984年第2次西藏工作座談会においても、観光がチベット自治区の支柱産業にならない旨が言及されている〔李鵬「發展經濟、培養人材、繁榮西藏」中共中央文獻研究室1990, 270〕。
- (3) 「～人」とは基本的に国民国家を形成している人々に対して用いられるため、本稿では、「チベット人」とは表記せず、中国の少数民族の一つとして認識されている「チベット族」と表記する〔松本1996, 14; 山影1988, 14-15〕。
- (4) 2007年現在の城関区のみの人口。所属の県を併せると約46万人（『西藏社会經濟統計年鑑2008』36）。
- (5) 観光の大量化、大衆化〔北川2004, 12〕。
- (6) たとえば、2008年3月14日にラサの騒動が発生して以来、6月25日まで観光客受け入れが中止されていた〔西藏自治区旅游局2008「西藏自治区正式回復開放入境旅游」6月24日〕。
- (7) 中国の観光政策については、松村（2000, 2001）、謝（2005）らが論じている。観光の

発展が地域社会や自然に与える影響について、長谷川（2001）、Deng（Deng et al. 2003）らが事例研究を発表している。曾（2001）、Xie（2003）らは観光人類学の立場から論じている。環境問題について、清水（2005）がエコツーリズムの重要性を説いている。

- (8) いずれもチベット自治区西部に位置する。
- (9) 1961年のインド政府の国境封鎖により中止され、1981年に復活した〔胡・陳2001, 36〕。
- (10) 観光の定義については、橋本（1999, 55）と日本交通公社（2004, 4-5）を参照。
- (11) 中国国際旅行社とは主として国際観光を扱う旅行社で、当時としては中国唯一の存在であった。
- (12) 国際観光客向けのホテルで、5段階にランク付けされている〔中国国家旅游局1988『關於対全国旅游涉外飯店按五星制評定星級的通知』〕。
- (13) 中国では、統計上、香港・マカオ・台湾からの観光客は国際観光客として算入されている。
- (14) 國務院弁公庁1999.『關於做好全國節日放假期間有關工作的通知』。また、國務院弁公庁転發国家旅游局等部門2000.『關於進一步發展假日旅游若干意見的通知』によれば、「國務院が法定休暇（労働節、国慶節）を増やした後、休日の旅行が急速に喚起された」と述べられている。
- (15) サンゲ・ドゥングはボタラ宮の周囲を巡る巡礼路の出発点。アニツァンゲンとは大昭寺の近くに建つ尼寺である。薬王山はチベット語でチャクポリ（lcag po ri）と呼ばれ、摩崖石刻などが見所となっている。
- (16) 中国国内の旅行会社もラサのみを訪れるツアーや、ラサの他にシカツェまたは林芝方面も併せて訪れるツアーなどを設定している。全体的に日本の旅行会社と異なり、ラサ観光の内容によって他社との差異化を図る旅行会社は少ないようだ。
- (17) グライラマ政権を指す。
- (18) 821年、唐とチベット王国との間で結ばれた会盟を記念して建てられた漢文とチベット文からなる碑。
- (19) 防災や安全上、ボタラ宮内ヘライターやはさみ、ナイフは持ち込みが禁止されている。（2007年9月16日現在）
- (20) 2007年6月22日、中国のQ旅行会社のZ氏からのメールより。
- (21) 五体とは全身のこと。全身を投げ伏して仏や高僧、師匠などを礼拝する〔『岩波仏教辞典』2002, 336-337〕。
- (22) たとえば、ヒンドゥー寺院ではネパール最大のパシュパティナート（Pashupatinath）寺院〔2008年1月筆者訪問〕が挙げられ、イスラム教では同じ中国の西寧の清真大寺〔2000年8月筆者訪問〕などが挙げられる。
- (23) 僧侶に対する愛国主義教育の重要性は、これまで度々強調されてきた。たとえば、1996年に開かれたチベット自治区共産党委員会の会議においても、特に僧侶を指定して愛国主義教育の必要性和その強化がうたわれている〔中共西藏自治区委員会党史研

究室2005, 745]。

- (24) 中国政府は宗教信仰の自由は認める一方で、宗教事務に関する管理の強化と宗教が社会主義社会に適応することを積極的に導くことを基本的な方針としている [阿沛・阿旺晋美2003.「党的民族政策光輝実践」中共中央文献研究室, 329-335]。
- (25) 観光スポットにおいて、旅行会社のガイドや添乗員が案内するのではなく、その観光スポットの専門家が行なう形態を指す。また、見学時間や一度に引率する見学者の数は予め決められている。
- (26) 青蔵鉄道開通後、チベット観光のオフ・シーズンであった冬季にも、旅行者が増加している [西藏日報2007.『西藏冬季旅游“淡季不淡”』12月22日] ことから、今後社会の安定が保持されるなら、2007年の実績以上に多くの観光客がチベットを訪れると予想される。なお、2008年3月のチベット騒動以前において、2008年にチベット自治区を訪れる観光客総数は500万人 [西藏日報2007.『明年西藏旅游人数有望達到500万人次』12月22日]、2010年には600万人に達する [西藏日報2007.『西藏三年後有望接待游客600万人次』6月12日] と予想されていた。
- (27) たとえば、外務省の「海外安全ホームページ」では、イスラム教のモスクを参観する際には、トラブルに巻き込まれないためにも靴を脱ぐなど神聖さを汚さないよう注意を呼びかけている [『外務省海外安全ホームページ』『パキスタン』http://www.anzen.mofa.go.jp/info/info_4_S.asp?id=051 (2008年9月16日アクセス)]。
- (28) 内発的観光開発と外発的観光開発については石森 (2001) を参照。

(やまだ のりゆき、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程)